

二〇二〇年二月二八日

梅の香や楷書でしかと祈願絵馬
藪椿 天蓋なせる磨崖仏
大涅槃絵図の裾懸け余しけり

たか子
智恵子
はく子

二〇二〇年二月二七日

ショーウインドに髪整える街うらら
大木の侍者の如くに水仙花
凍て空に星のまたたく峡の里

やよい
ぽんこ
宏 虎

二〇二〇年二月二六日

枝垂れ梅傘代はりとす野点席
濃く淡くグラデーションに草萌ゆる

なつき
かかし

二〇二〇年二月二五日

うららかや駄菓子屋は扉を開け放ち
春愁や外部者見舞ひお断り
一万歩までと背を押す木の芽風
あるだけの庭水仙を今朝の供花
降り立ちてオリオン仰ぐ郷の駅

満 天
明日香
たかを
菜 々
こすもす

二〇二〇年二月二四日

川船の飛沫に春の光見ゆ
墓詣でついでに丘の梅探る
矢印は乗馬倶楽部と芽木に札
下萌に白亜のグリンチャペルかな
春風に髪なびかせて騎馬乙女
かたばみを敵のごとく抜いてをり

智恵子
はく子
菜 々
せいじ
菜 々
明日香

二〇二〇年二月二三日

春しぐれ少し傾げて蛇の目傘
口笛のごと篋子鳴く里山路
春昼やのんびり聞こゆ鳩時計

菜 々
せいじ
みづき

二〇二〇年二月二二日

馬場うらら馬蹄模したるゴール板
釜出しの壺にぶつかる春の雪

たか子
みづき

毎日句会みのる選・二〇二〇年三月一日